

平成 17 年 8 月 8 日

各 位

会 社 名 株 式 会 社 グ ッ ド マ ン
代 表 者 名 代 表 取 締 役 社 長 山 本 明
(JASDAQ コード 7535)
問 い 合 せ 先 経 営 企 画 室 長 余 語 岳 仁
電 話 番 号 052-774-4350

株式会社アイアールメディカル工房の子会社化に関するお知らせ

当社は、株式会社アイアールメディカル工房の株式を取得し、子会社化いたしましたので、ここにお知らせいたします。

記

1. 株式取得の目的

当社は、これまで循環器分野（インターベンショナル・カーディオロジー）で使用される血管内検査用及び治療用カテーテルの輸入、開発、製造、販売を中心に事業を推進してまいりました。

この度、当社にとりまして新しい事業分野に進出するため、株式会社アイアールメディカル工房の株式を取得することにより子会社化いたしました。

株式会社アイアールメディカル工房は、1999年に脳血管内治療用（脳卒中）および放射線科治療用のカテーテルを開発する目的で設立されました。

当社は、株式会社アイアールメディカル工房を子会社化することで、これまでの循環器分野に加え、今後成長が期待される脳血管内治療分野（インターベンショナル・ニューロロジー）および放射線科治療分野（インターベンショナル・ラジオロジー）に進出することが可能になるとともに、双方の会社の製品および知的財産を、それぞれの治療分野に応用することによる相乗効果も期待されます。

2. 異動する子会社（株式会社アイアールメディカル工房）の概要

- | | | |
|----------------------|----------------------------|--------------|
| (1) 商号 | 株式会社アイアールメディカル工房 | |
| (2) 代表者名 | 河邊大輔 | |
| (3) 所在地 | 福島県郡山市本町 1-5-10 カナヤマ第一ビル | |
| (4) 設立年月日 | 平成 11 年 2 月 22 日 | |
| (5) 主な事業の内容 | 脳血管内治療、放射線科治療を中心としたデバイスの開発 | |
| (6) 決算期 | 7 月決算 | |
| (7) 従業員数 | 11 名 | |
| (8) 主な事業所 | 東京支店 | |
| (9) 資本の額 | 453 百万円 | |
| (10) 発行済株式総数 | 3,965 株 | |
| (11) 大株主構成および所有割合 | 株式会社グッドマン | (所有割合 39.1%) |
| | チャレンジ・ジャパン・インベストメント(株) | (所有割合 17.7%) |
| | 東北イノベーションキャピタル | (所有割合 10.1%) |
| (12) 最近事業年度における業績の動向 | | |

	平成 16 年 1 月期	平成 16 年 7 月期
売上高	351 百万円	164 百万円
売上総利益	54 百万円	9 百万円
営業利益	46 百万円	69 百万円
経常利益	47 百万円	57 百万円
当期純利益	46 百万円	80 百万円
総資産	199 百万円	248 百万円
株主資本	3 百万円	18 百万円
一株当たり配当金	- 円	- 円

(注) 平成 16 年 7 月期は、決算期変更により 6 ヶ月決算となっております。

3. 株式の取得先

既存株主 33 名より発行済株式総数の 1,176 株を取得済みまたは取得手続中であります。なお、取得年月日及び譲渡金額は手続中の取引があるため未定であります。

4. 取得株式数、取得価額および取得前後の所有株式の状況

- | | | |
|---------------|---------|--------------|
| (1) 異動前の所有株式数 | 1,550 株 | (所有割合 39.1%) |
| (2) 取得株式数 | 1,176 株 | |
| (3) 異動後の所有株式数 | 2,726 株 | (所有割合 66.8%) |

5. 子会社化後の連結業績見通し

脳血管内治療分野は、当社にとりましても新規分野であることから、現在中期経営計画を策定中ではありますが、3 年後に 50 億円の売上増加を見込んでおります。

以 上

(ご参考)

株式会社アイアールメディカル工場の代表的開発製品（ミントキャッチ）

脳血管内治療は脳卒中疾患を対象としております。脳卒中の原因には、脳の血管が詰まって血液が流れなくなる“脳梗塞”と、脳の血管が裂けて出血する“脳出血”の2種類があり、これらにより脳の組織が傷害されることによって発生いたします。

脳血管内治療はわが国では約20年前から開始された比較的新しい治療法で、特に最近の10年間で大きな発展を遂げてきており、従来、治療の中心であった外科的手術と比較して血管内治療には次のようなメリットがあり、今後の高齢化社会においてはさらに普及していくと予測されています。

- ・外科手術と比べると患者への負担が少なく、高齢者や合併症を持った人にも施行できる。
- ・全身麻酔を用いずに、下肢の付け根部分への局部麻酔のみで治療可能な場合もある。
- ・外科手術と違って頭に傷をつける必要がなく、治療後の安静臥床の期間や入院期間が短い。

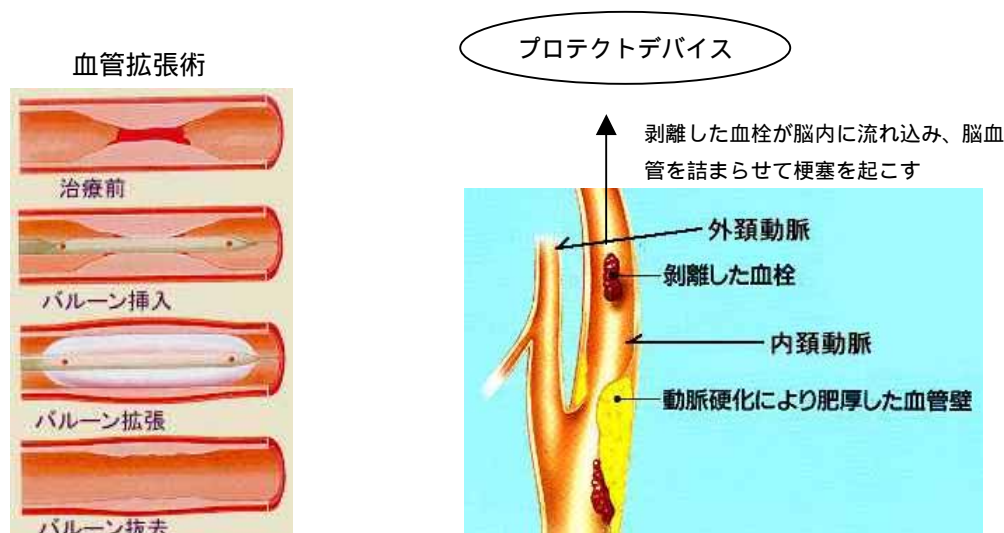
カテーテルや血管内治療関連製品の市場規模は、2004年度が前年比3.1%増の2573億円（矢野経済研究所資料）と推定されておりますが、7～8割程度が心臓血管向け、脳は2割程度であると考えられています。しかしながら、次のデータの通り、患者数と医療費は心疾患よりも脳血管疾患の方が多くことから、現在の市場サイズから推測して、脳分野の血管内治療も普及が進めば、1000～2000億円規模の市場となるポテンシャルを秘めていると考えられます。

心血管疾患と脳血管疾患の比較

	患者数（2002年）	医療費（2000年）
虚血性心疾患	911千人	7363億円
脳血管疾患	1374千人	1兆7862億円

厚生労働省データ

現在は血管内異物回収用バスケットワイヤーとしての認可ですが、頸動脈（首にある動脈）の狭窄に対する血管拡張術を行う際に、血栓が脳内に飛んで脳梗塞を起こしてしまうリスクを下げるためのプロテクトデバイスとしての応用が期待されております。

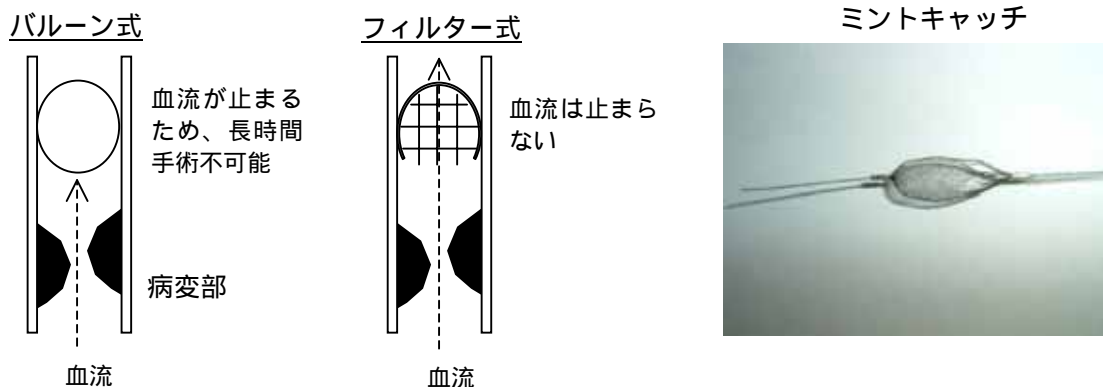


頸動脈の先は脳に直結しています。そのため、動脈硬化によって狭くなった血管をバルーンで拡張させる血管拡張術施行時に、病変部に存在する血栓が脳内に流れ込み、その血栓が脳血管に詰まって脳梗塞を起こす危険性が高いと考えられています。

この問題のために、これまで頸動脈狭窄に対する血管拡張術は広く行われておりませんでした。2000年を境にバルーンで血管を塞ぐことによって血栓の脳内への流れ込みを防ぐプロテクト

デバイスが販売されたことをきっかけに、症例数が大きく伸び始めています（2000年/950例から2001年/2480例：会社調べ）。

しかしながら、このバルーン式のプロテクトデバイスには、“血流を止めてしまうために長時間の手術には使用できない”という欠点があり、適応できる症例は限定されることとなります。そこで、医療現場では、血流を止めず血栓だけをキャッチすることができるフィルター式のデバイスが求められてきました。



ミントキャッチは、形状記憶合金をバスケット状に編んだ血管内異物除去用カテーテルとして、既に薬事認可を取得し2004年8月から販売を開始しております。

頸動脈血管拡張術の症例数は、2003年度で5000例程度と推測されており、市場規模は7億円弱にすぎないと考えられています。しかし、冠動脈拡張術の症例数15.7万例に対し、頸動脈の潜在症例数はその15～20%の3万例程度はありと予測されており、そこから推測する潜在市場規模は40億円程度となります。

また、プロテクトデバイスのニーズは頸動脈に限らず存在しており、ミントキャッチも当社との共同開発により循環器分野に展開することで飛躍的な販売増加が期待されます。

これらの期待に対し当社では共同で更なる製品改良を加え、血管内血栓異物除去用留置フィルターとしての認可取得を開始しました。

ミントキャッチ以外にも、株式会社アイアールメディカル工房では、医療現場のニーズを汲む開発中の製品が50品目以上存在しており、当社が子会社化することで、それらの製品開発も一気に加速することができるものと考えております。